

なす「うどんこ病」(施設栽培)の発生が増加中！

(平成26年6月4日)

5月の発生予察巡回では、泉州地域の施設なす栽培で、平年に比べうどんこ病の発生がやや多く見られます。発生が増加傾向ですので、今後注意が必要です(表1参照)。

うどんこ病は、気温が28度前後、湿度は50～80%、日射はやや弱いときに発生しやすくなります。

施設栽培では年中発生しますが、特にこれから6月にかけて例年発生が増えてきます。多発すると、葉のみでなく果実のがくにも発生することがあり、商品価値が低下します。

今後、露地なすでも発生が増えてきますので、初期防除に努めましょう。

表1 うどんこ病の発生状況(平成26年5月調査)

| 調査地点 | 発病葉率(%) | | 備考(栽培品種) |
|----------------|---------------|---------------|------------|
| | 5月前半*1 | 5月後半*1 | |
| 泉佐野市(日根野) | 52.0 | 60.0 | 水なす |
| 貝塚市(海塚) | 76.0 | 80.0 | |
| 岸和田市(河合町) | 0.0 | 0.0 | |
| 河南町(一須賀) | 0.0 | 0.0 | 中長系なす |
| 富田林市(西板持町) | 0.0 | 0.0 | (千両2号、小五郎) |
| 平均値 (平年値)*2 | 25.6 (1.9) | 28.0 (1.6) | |

*1 泉佐野市、貝塚市、岸和田市(前半5/2、後半5/20調査)
河南町、富田林市(前半5/14、後半5/26調査)

*2 平年値は、過去10年間調査平均



▲うどんこ病(葉表)



▲うどんこ病(葉裏)

<生態と防除>

主に葉に発生する。多発すると葉柄、茎、果実、果柄、がくにも発生する。下葉から発生し、徐々に上位の葉でも発生が増える。

うどんこ病は、糸状菌(かび)の仲間で、*Sphaerotheca fulliginea* の他 2 種の病原菌がある。純寄生菌であり、生きた植物でのみ寄生できる。

はじめ葉の表面に点々と小さな白いかびが生じ、次第に円形に広がり、葉全体がうどん粉をふりかけたような病斑になる。葉裏にも白色のかびを生じ、果実のがくや果柄部分にも白い斑点(かび)を生じ、品質を低下させる。

ひどくなると黄褐色になり落葉する。病斑上に形成された胞子が空気中に飛散して伝染する。

乾燥条件で発生が増加し、密植した場合や株が繁り葉が混み合うと被害が増加しやすい。施設栽培では、外張り資材のビニール等が汚れると日射量が低下し発生が増える。一度発生すると防除が難しくなるので、早めの防除を心がける。

同一系統薬剤の連用散布は、耐性菌発生の原因になるので、異なる系統の薬剤をローテーション散布する(表2参照)。

表2 散布薬剤の例

| 薬剤名 | 希釈倍数 | 使用時期／使用回数 | 成分数(一般名) |
|----------|---------|-----------|--------------|
| ベルコート水和剤 | 3,000 倍 | 前日／3 回 | 1(イミノクタジン)*3 |

| | | | |
|---------------|--------------|-------|-------------------------|
| フルピカフロアブル | 2,000～3,000倍 | 前日／4回 | 1(メハ°ニヒ°リム)*4 |
| パンチョ TF 顆粒水和剤 | 2,000倍 | 前日／2回 | 2(シフルフェナミト`+トリフルミゾール)*5 |
| ラリー水和剤 | 4,000～6,000倍 | 前日／4回 | 1(ミクロブ`タニル)*6 |
| アフェットフロアブル | 2,000倍 | 前日／3回 | 1(へ°ンチオヒ°ラト`)*7 |

*3 本剤を含めて、イミノクタジンを含む剤のなすでの総使用回数は3回以内。

*4 本剤を含めて、メハ°ニヒ°リムを含む剤のなすでの総使用回数は4回以内。

*5 本剤を含めて、なすでの総使用回数はシフルフェナミト`を含む剤は2回以内、トリフルミゾールを含む剤は5回以内。

*6 本剤を含めて、ミクロブ`タニルを含む剤のなすでの総使用回数は4回以内。

*7 本剤を含めて、へ°ンチオヒ°ラト`を含む剤のなすでの総使用回数は3回以内。

◎防除薬剤については、

●Web 版大阪府農作物病害虫防除指針

(<http://www.jppn.ne.jp/osaka/>)

●農林水産消費安全技術センター 農薬登録情報提供システム

(http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm)

にて確認してください。